

火 と 光

(仏身觀の変遷)

高 橋 堯 昭

私はガンダーラの山寺を歩きながら、この地で成立した大乘仏教の基盤を表わす一特徴として「火」と「光」と「水」を考えて来た。ここではまず「火」と「光」について述べよう。

(一) 「火」

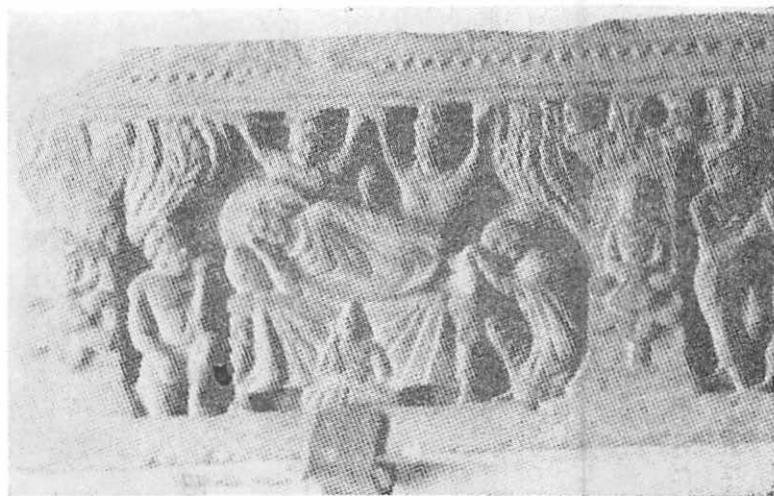
パキスタンのあらゆる博物館を尋ね歩いていこう、一つの興味ある問題に目がとまった。それは広い意味のガンダーラと称せられる地域の中で、パキスタン側とアフガニスタン側とは異った傾向があることだ。⁽¹⁾かつてアフガニスタンのカーブル博物館を尋ね、モタメディ館長の好意で全仏像の写真をとらせていただきながら、見過して来たもの、即ち涅槃図と燃灯仏の彫刻をパキスタン側のものと比較して見て大きな差のあることが分った。

(A) まず涅槃図から考えてみよう。即ち中央に横たわる釈尊をかこんで前と後ろに手を挙げたり、頭をたいたいたり、胸を打ったり、或は身を投げ出したり、或は頭髪をかきむしって悲しむ姿が如実に表現されている。これは摩訶摩耶経の「或有宛転干地、或有牽絶衣服嬰珞、或拔頭髮、捶胸大叫」⁽²⁾の記述にそっくりな表現である。

火と光 (高橋)

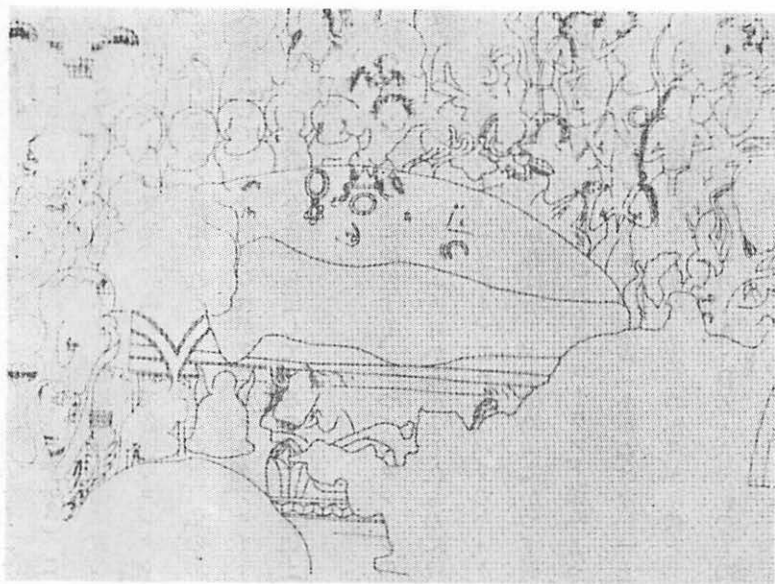
こうした多くの悲しむ人々の中にあつてどうしたことか一人が牀前でじっと坐っている。百二十才で釈尊入滅の直前、最後の弟子となったスバドラだ。長年バラモンの修業を積んで生死を超越しているせいか端然として禅定に入っている。この対比が又面白い。このスバドラはガンダーラでも又インドでも共に牀前で禅定に入っている姿で表現されているが、これがアフガニスタン側では少々変化している。即ちパーミヤンの壁画ではどうしたわけか火炎が肩から出、又火に包まれて坐っている。法顯訳大般涅槃経³や玄奘の大唐西域記⁴、そして大智度論に「須跋陀梵志仏前に在って結跏趺坐し、自ら神力をもつて身中より火を出し、身を焼いて滅度をとる⁵」とあるように大乘系の經典の出現に至つて、この火炎の表現が出て来るのは興味深い。

私がかつて何回かパーミヤンを尋ね、この壁画をカメラにうつし判別出来るよう努力を重ねたが、余りにも剝落がひどく、肉眼ではどうやら区別出来るのだがフィルムではどう努力しても判別出来なかった。思うに目は立体的に物をとらえ



1、ディール博物館

（この類型はベルシャワ博物館数体、大英博物館一体、その他多数）



2、パーミヤンK洞 (第330窟) 涅槃図 (京都大学調査隊による)

得るが、カメラは平面的に物をうつすからだと思った。為に京大隊報告書「パーミヤン」の第三三〇窟 (写真2参照) や名古屋大学の宮治昭氏 (仏芸一四七号) を参照させていただいた。

これらによれば、積尊の牀前に端坐するスバドラの肩からは火炎が立ち登っているのが分る。同じ涅槃図でありながらパキスタン側のものにはなく、アフガニスタン側のものにこのような火炎があるのはどうしたことだろう。パキスタン側の涅槃図はクシヤンの盛期、カニシカ一世の頃から作り出されているからA・D二・三世紀のものもある。一方パーミヤンはグプタ様式であるからA・D五・六世紀のものといえる。従ってかく時間差があるので比較にならないという論議も当然出て来る。従って他の面、即ち燃灯仏の彫刻からこれを考えてみよう。

(B) 燃灯仏で有名なのは現在ラホール博物館内に復元されているシクリのストゥーパのもの。ガンダーラ彫

刻の代表的なものとして有名である。大体 A・D 二・三世紀にもさかのぼると言われている。（写真 3）これと似た図柄の彫刻はバキスタン各地の博物館に数多く展示され、且つ又全世界にわたって各種のコレクションの中に数多く見出される。それ程この燃灯仏の形式は類似している。然しこれがアフガニスタンサイドになると「火炎」を背から出しているのが十程度出土している。

即ちカーブル東北に位置する、かつてのクシヤンの夏の都カピシ・ペグラム近郊から出土したものには仏の肩に炎がある。（写真 4）これらはバリのギメー博物館に一体、それ以外はカーブル博物館にかつて展示してあった。然してこれらはローランド達によって、その形態がローカルの、所謂「あかぬけない」という点から洗練されたギリシヤ彫刻の影響が年代と共に薄れて行った後期のもの、A・D 五・六世紀のものと考えられて来た。



3、ラホール博物館 シクリの仏塔より

然し最近の研究ではやはりこの「あかぬけない」点から後期のものとして考えられて来たスワットのデール地方の仏像が、そのローカル性の故にギリシャ芸術の堕落ではなくその地方その地方の特殊性を失わないでギリシャ彫刻の手法をとり入れた時代のものとして、むしろ最初期のもの

の即ちA・D三世紀にまでさかのぼるものとして考える方向に進んで来た。⁽⁶⁾ 従ってこのカピシ・ベグラム近郊の出土の燃灯仏も、むしろこの「あかぬけなさ」の故に早い時機のものとして考えられるに至った。⁽⁶⁾ 従って三・四世紀にさかのぼれるということになった。

このような視点に立って考えると、このカピシ・ベグラムの燃灯仏もシクリのそれも、ほぼ同時代のものと言え

火と光（高橋）



4、在 カーブル博物館 カピシ・ベグラム出土、カピシ・ベグラム出土の同型のもの数体（カーブル博物館）パリー・ギマー博物館一体

る。従って一方が火炎を肩にし、他はこれが全然ないというタイプピカルな類型が私には興味をさそう。

尤もバキスタン側にこの火炎仏・炎肩仏が全然ないわけではないが、極めて稀であるといってよい。燃灯仏ではないが肩から火を出すものとしてたった一つベシヤワル博物館にある。巾十センチ、高さ三十センチの小品で足から水を出している双神変像がある。然もガンダーラ特有の黒色片岩と違って青っぽい黒、即ちスワット地方のものであると私は見ている。

筆者はこの炎肩仏・双神変像に興味をもち極力これを集めて来た。現在三体集っている。このうち二つは明らかにスワット系の石であり、他の一つは黒色片岩であり、マルダン地方出土のものに岩質は似ているが、然しこれを取扱った現地商人はスワットの農夫が持つて来たと言っているからスワット出土は確実であろう。かく考えるとガンダーラ後期のもの、私の見解ではA・D四・五世紀にはこのような「火炎」をもった仏がガンダーラの北辺に流布していったことが分る。

更に私は前々号に於てクシャンのコインについて言及したが、ヴィーマカドフィーセス王の肖像に「炎」が現れて以来、カニシカ、フウヴィジカ等の諸王のコインにひき継がれ、又その裏面にミントされた諸神にも火が作られた。そして又フヴィジカやバスデーバに至ると火炎の代りに太陽の光芒を示す円環が諸神の頭の後ろに現れ、又王の頭にも作られて来たことを書いた。私はこの円環（光背）も火炎と同じく、人間の王ではなく、「大王・諸王の王・天子」と最高の天子・即ち天の子という超能力をそなえた王としての立場を示すためにこれが描がかれた。

同様に釈尊も生身のものではなく久遠のものへの超越を示す手段として釈尊の上に「炎」が描かれるに至った。いわば「仏身観」の展開発展がこれで示されると私は考える。

然も造像上このことを如実に示す例として、シクリの燃灯仏彫刻では釈尊の前身たるメーガの姿が、大きさをバランスよく表わされているのに、カピシ・ペグラム出土の燃灯仏像はメーガに対して余りにも巨大すぎる。(写真4参照)これこそ仏を超越者として表現しようとする意欲がこれによりとれるのではあるまいか。

かく仏の超人性を表すに「火炎」をもってする手法はまずアフガンサイドで起り、それが時代と共にバキスタン側に伝わり、特にスワット地方で行われて行くことが、この涅槃図燃灯仏の比較で考証されると思う。

[註]

- (1) 狭義のガンダーラはバキスタンのタキシラからベンジャワル地方も少し広いとアフガニスタンのジュララバード・ハツダを含む私は広い意味でカピシ・ペグラム地方を含めて考えている。
- (2) 大12—1012上
- (3) 大1—204中「時須跋陀羅 即於仏前入火界三昧 而般涅槃」
- (4) 大51—904上
- (5) 大25—81上
- (6) 仏芸一一七号モタモテ造子氏論文、及オリエント学会一九七二迦畢試国出土の仏教彫刻の製作年代について
- (7) Rosenfield *Dynastic Art of Kushan*
- (8) *mahārājasya rājatira (ja) sya devaputrasya*
- (9) 足元に伏す小さなメーガに対して巨大な仏→超越者を表現

(一) 「光」

前述の如く、大乘仏典の特徴は仏を超越的なものとして考える所にある。即ち阿含経等に現れる釈尊はいわば生身のそれ、インドに生れ、そこで悟り法を説いた仏であった。いわば覚者である。従つて阿含経では後述の大乘経典が仏の偉大さを光明の奇蹟で表現するような必要を生じなかつたといえる。勿論釈尊が河の底を通つたり（サンチーの彫刻）又大迦葉を帰依させるために種々の奇蹟を行った（所謂ミラクル・オブ・スラバステ¹）といったものもないわけではない。然し自ずと大乘経典の中に現れている光明等の奇蹟とは根本的に異り、前述の如き「仏身觀」の変遷を感じさせられる。

私はかつて法華経の序品の白毫相から光を出したり、神力品の「広長舌を出して上梵世に至らしめ一切の毛孔より無量無数の光を放ち……、宝樹下の師子座上の諸仏も亦、広長舌を出して無量の光を放ち……」という「光」の問題を考えてみた。

然してこの釈尊の放光の奇蹟は法華経の独断場ではなく、釈尊の「超越性」を示す法華経成立当時の流行語？のよなものであったことを知り我れながら驚いている。即ち大藏経を一瞥して「光」や「火」の表現を探してみる時「仏が授記を与える時口中から五色の光を放つ」というのが常套手段であつたことが分つた。然して口中から種々の光を出したという場面（さ）を参考の為に詳記してみると次の如くなる。

支婁迦讖識の道行般若経に五ヶ所。兜沙経に二ヶ所、阿闍世経に一ヶ所。仏説無量清淨平等覚経に十ヶ所、阿闍世
国経に三ヶ所、般舟三昧経に一ヶ所出ていた。

支謙訳の經典では大明度經恒竭清信女經（これは支婁迦讖訳の道行般若經の異訳）に二ヶ所。菩薩本業經（これは支婁迦讖訳の兜沙經）に一ヶ所、私阿味經に一ヶ所。仏說阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道經（支婁迦讖訳の仏說無量清淨平等覺經）の卷の上に八ヶ所以上、卷の下に三ヶ所ある。又、七女經に一ヶ所。竜施女經に一ヶ所。仏說竜施菩薩本起經に一ヶ所、。慧印三昧經に一ヶ所ある。

竺法護訳の經典、仏説心明經、梵志女首意經、文殊師利現寶藏經、順權方便經、等集衆徳三昧經、弘道広顯三昧經、普曜經等々に夫々一ヶ所、文殊師利仏土嚴淨經には三ヶ所もある。

支曜訳には成具光明定意經に一ヶ所ある。

羅什の訳としては集一切福徳三昧經に一ヶ所、仏說阿弥陀經に三ヶ所あり、又そこには炎肩仏の「火」についての表現もある。特に

康僧鎧の無量壽經では「光」が三ヶ所、「炎」が二ヶ所も出ている。

その他修業本起經に一ヶ所、仏本行經に二ヶ所、仏本行集經には「炎」や「光」と「火」が並記されている。

又大乗以外の經典としては

根本説一切有部毘奈耶、卷九に二ヶ所、卷三十八、卷四十六に各一ヶ所。葉事卷二、卷七、卷八に各一、雜事の卷二と卷三十二に各一ヶ所。

増一阿含の第三十六に三ヶ所、第三十八に一ヶ所。四分律第五十一に一ヶ所。

五分律卷三に一ヶ所出ている。これは光だけではなく、火と水にまで言及している。

以上經典に光と火の出ているものを抜き出してみたが、これらの色の種類や出入の場所に関しては参考の別表をみ

ていただきたい。

私はこれらが大藏經からぬき出して表にするうち一つの法則性がここから読みとれるような気がしてならなかった。この光（火はごくわずかだが、時には並記されている）の出ている経典を訳した人々は「支」のついた国、所謂、大月氏出身の人である。更に羅什もクッチャの人だが母がインド人でカシミールに遊学している。竺法護も「竺」が竺高座の弟子ということであつて、出身は大月氏であり、康僧鎧も康国即ち今のサマルカンドの出身であり、大月氏の勢力範囲と深くかかわりをもっている所の出身である。

又大乗以外の経典でも根本説一切有部毘奈耶はカシミールからガンダーラにかけて基盤をもっていた有部の律であり、増一阿含もガンダーラの地名や川の名がよく出て来るからガンダーラ地方で作られたものと言われている。尤も阿含経は釈尊滅後から大乘の成立した後までも順次補って作られ続けて来たから、後期のものは大乘の影響がなかつたとは言いきれまい。ちなみに四分律第五十一、増一阿含の卷三十六、卷三十八等、経典の後半に位置している所に「光」が出ているから、大乘の影響はともかく、そのような精神的風土に於て大乘経典と同じような環境の上でこれらの小乗経典も生れたとも言えよう。

かく考えて来ると、この「光」と「火」の表れている経典を訳した僧は大月氏、即ちクシヤンの勢力範囲の人であつたことが分る。このことを裏返せば、この経典の成立したクシヤンの領土内に「火と光」をもつて釈尊を超越者として表現しようとする傾向があつた。否むしろ釈尊を人間釈尊ではなく、この「火と光」をかりて超越者として考える思考方法、即ち仏身觀の転換があつたことが理解されよう。

前述の如く、「光」によって仏の莊嚴さ偉大さを示す傾向心情があつたということは、釈尊が人間ではなく超人的

な力をもつ仏、法華経流に言えば「生身の釈尊から久遠の本仏」への立場の飛躍。この重大事件がこのガンダーラで行われたことが分る。これが小乗から大乘への宗教運動であり、然もこの超越飛躍を媒介するものがこの「火と光」であったと私は考える。これが又前述のコインの太陽の光芒を思わせる円環光背のリングであり、又王や神の肩から炎々ともえ上る炎であったと思う。

〔註〕

(1) ベンジャワル博物館蔵やサンチーの彫刻

(2) 以下は別表参考

〔参考〕

支婁迦讖

道行般若経卷六(大8―四五八上) 仏笑口中金色光出優婆夷即持金華……不墮地

卷八(大8―四六八中) 口中出若干色其明至十方仏刹悉明其明還遍仏三匝從頂上入

卷九(大8―四七一中) 身有金色身放十億光炎

◇ (大8―四七三中) 於上虚空中有化仏身有三十二相紫磨金色身有千億光耀炎出

卷十(大8―四七六上) 焰三昧

兜沙経(六十華嚴第四・第五及び支謙訳菩薩本行経第一品の異訳)

(大10―四四六上) 仏放光明先從足下出照一仏界中極明現十億閻浮利天南

阿闍世王経卷上(大15―三九三中) 其臂者一一毛放百億千明其臂上毛一一有百千光明一一明者有億千蓮華一一蓮華上者有菩薩

仏説無量清淨平等覚経(大阿の古訳・支謙訳阿弥陀三耶三仏薩婆仏檀過度人道経の異訳)

第一(大12―二七九下) 面有九色光数千百度光甚大明面色光明乃此耳

◇ (大12―二八〇上) 焰宝光……紫磨金焰

火と光(高橋)

火と光（高橋）

第一（大12―二八〇中）如是之焰明

◇（大12―一八一中）十三我作仏時令我光明勝於日月……焰無數天下窈冥之所

◇（大12―二八二中）焰照十方仏国

第二（大12―二八八中）此数光從口出遍焰諸教刹則廻光還邊仏三匝已從頂入

◇（大12―二九〇上）頂中光明焰照他方

第三（大12―二九〇中）無量清淨仏光明照國中及焰照他方仏国

◇（大12―二九二下）第三焰天

第四（大12―二九六中）比如火起燒人（これと同じ表現他に二九六中にあり）

阿闍仏国経第三（大11―七五七中）中有阿羅漢身中自出火還燒身而般泥洹

第五（大11―七六一上）阿闍仏身中出火還燒身已便作金色

◇（大11―七六三上）炎照他方世界

般舟三昧経卷中（大13―九二上）時笑仏國中金色光出至十方不可計仏国

支識

大明度経恒竭清信女品（大15―三九三中）仏笑口中金光出清信女即持金華散仏上仏威神故不墮地

強弱品（大15―一五〇二中）口中出若干色其明至十方仏国悉為其明

菩薩本業経（兜沙経の異訳）（大10―四四七上）仏放足下相輪光明悉照仏異小国土

私阿味経（大14―一八一三中）仏爾時便笑無數色々……從口出光照無央數仏国還繞身三匝於頂上使不見

仏説阿弥陀三耶三仏薩婆仏檀過度人道経（大阿）

卷上（大12―二九九上）第一仏名光遠焰

◇（三〇〇上）面有九色光数千百變光

◇（三〇〇下）頭中光明如仏光明 所焰照無極

◇（三〇二中）頂中皆有光明

◇（三〇二中）光明焰照

(◇) 三〇二の中→三〇三の上) この間多くの光明の表現あり

(◇) 三〇八中) 頂中光焰照他方……仏光明照國中及燄照他方仏國大明

(◇) 三〇九下) 是第三燄天

卷下 (◇) 三〇〇中) 但見其光明

(◇) 三一一下) 自然成五光五光乃至九色

(◇) 三二三下→三二四中) 比若劇火起燒人身人能自於中(三回)

七女經(大14—19〇九上) 是時迦葉仏笑五色光從口出照滿仏刹還繞身頂上入

竜施女經(大14—191〇上) 時仏乃笑五色光從口出照一仏刹還從頂入

仏説竜施菩薩業起經(大14—191一上) 時仏來詣舍眉開放光明

慧印三昧經(大15—146四下) 若干種光色色各異從口出青黃赤白遍照無央數仏刹皆覆蔽日月明還繞身三匝便從頂入

〔竺法護〕(除正法華)

仏説心明經(大41—194二下) 諸仏笑法皆有常瑞授菩薩決遍照十方光從頂入

梵志女首慈經(大14—194〇中) 欲五色青黃赤白紫光從口而出甚大光明普照十方無數仏國

文珠師利現寶藏經(大14—146五上) 仏便笑時三千大千世界無量光明遍滿其中……

順幢方便經(大41—143〇中) 無央數色從仏國出青黃白黑紫紅之色……

等集衆德三昧經(卷中)(大21—19八一上) 於時世尊知離垢威菩薩所念尋入欣入五色光從口光照十方無數仏國還繞三匝從頂上入

弘道広頭三昧經卷四(大15—15〇五上) 時世尊笑諸仏笑法口出五色香羅變光燄無數

文珠師利仏土嚴淨經(大11—189二中) 時仏因笑無數光色從其口出照於十方無量世界

(大11—189五下) 時仏欣笑口中五色光照十方還過三匝從頂上入

(大11—19〇〇上) 於時世尊尋便欣笑光從口出五色普……

普曜經卷八(大3—153一の上→中) 仏亦出烟龍大頤怒身皆火出、仏亦現神身出火光……

支那

成具光明定意經(大15—145五中)

皆見光從口出三色燿暉明接十方
其在痛者一時得安還從頂入自如常輝

火と光(高橋)

火と光（高橋）

羅什（除妙法華）

集一切福德三昧經卷中（大12―19九七下）爾時世尊即便微笑若干百千青黃赤白紅紫等光從面門出
 仏説阿彌陀經（大12―13四七中下）中出広長舌相……大縁肩仏……縁肩仏
 （大12―13四八上）大縁肩仏

康僧鑑

無量壽經（大12―12六七上）炎光・炎根

（◇） 二七〇中）炎葉光仏

（◇） 二七二上）一々華中出三十六百千億光一々光中出三十六億仏

（◇） 二七三上）口出無數光遍照十方国廻光圓遶身三匝從頂入

その他

修行本起經（大3―14六二中）仏乃蹈之即住而笑口出五色光出離口七尺分為兩分

一光繞仏三匝光照三千大千刹土莫不得所

還從頂入一光下入十八地獄苦痛一時得安

仏本行經（大4―8二中）頭上火炎然口中亦吐火 身放火炎

（◇） 九三上）即時欣笑五色光明躍出從口出若干彩色

仏本行集經五十三（大3―18九七上及八九八上）身或放烟惑於炎火……入於火光三昧

根本説一切有部毘奈耶

卷九（大23―16六九中）即便微笑口中出五色光或時下照或復上昇光下者至無間獄機余地獄若受炎熱皆得清涼

（◇） 16六九下）仏世尊過去事光從背入……從眉間入（その他あり）

卷三十八（◇） 18三五中）時彼光明遍照三千大千世界已還仏所光從背胸足指掌入……光從眉間入……光從頂入

卷四十六（◇） 18七九上）世尊法爾若微笑於口中出五色光明

菓事卷二（24―16八上中）敷座而坐熙怡微笑口出五色光或時下照……

卷七（24―12九下）於微笑時出青黃白等光從如來口分三道……

卷八(24―三六下) 諸仏常法若有微笑即放青赤白種々之光從口而出
雜事卷二(24―二―中) 口出五色微妙光明或時下照或復上昇

卷三十二(24―三六七下) 遂便微笑口出五色微妙光明或時下照或上昇

增〔阿含〕

第三十八(大2―七五八中) 是時灯光仏即入三昧定健彼梵志見其二相

是時灯光仏復出広長舌……放大光明……

第三十六(大2―七五〇下) 身飛虚空作大八變化或行或坐……身放烟・火踊設自由無所触礙……或出水火遍滿空中

(大2―七五一上) 口出五色光

(大2―七五七上) 即便微笑口出五色光

その他

四分律五一(大22―九四九) 身出烟・綖猶若大火

五分律卷三(大22―二二上) 身上出火身火出水

参考(火のつく仏)

現在賢劫千仏名經(大14卷) ……南無綏肩仏・南無衆綏仏(378中) 南無宝火仏(378下) 南無綏熾仏(379中)

十方千五百仏名經(大14卷) ……火炎肩仏(312中) 宝炎仏・放炎仏・火然仏以上(312中) 通炎華仏(313上) 網光仏・火相仏・宝火

仏・火光明仏・火相仏・宝火仏以上(313中下) 炎肩仏・火灯王仏・宝火仏(315中) 火目仏・炎光

仏・炎味仏・火光仏(316下)

(三)

これらの思想的飛躍はこのクシヤンの世界で起った。(二)に出て来る沢山の教典がここで作られたと推測されるからである。

火と光(高橋)

然して更に(一)のガンダーラ彫刻を資料としてこれに重ね合せる時、(尤も彫刻では光の表現はむづかしく、従つて光背や火の表現に重点がむけられるのであるが、——この火と光との関係については次号で述べるつもり——)この火が最初はバキスタンサイドには出ず、アフガニスタン側、即ち西方からである。もしこれがリグ・ベータ以来のアグニの火の伝統であつたら当然バキスタン側の方に先に火が出る筈であつたが。

然してここにユニークな彫刻がある。それはカラチ博物館にある「裸行者の信者である婚家の家族の中で孤立しているスラバステイの長者の娘のために、仏が率卒天から降りられて奇蹟を行じてこれを助けた」という彫刻である。横六十センチ、高さ三十センチの大きさだ。この彫刻には仏の頭はないが、肩から火足から水が出ている。これが燃灯仏で有名なシクリから出土している所に大きな意味をもつ。年代はストゥーバの燃灯仏彫刻より少し年代が下つてA・D四・五世紀、早くても三世紀の後半であろう。このことから考えると、火の出ていない燃灯仏より、さして時代が下らない頃にもうこの彫刻のように「炎」のついた仏像が、然もガンダーラを中心たるこのシクリに出ている。

勿論前述のようにカニシカコインがクシヤン全域に流通しているから、コインの炎がこの彫刻に影響したとも考えられるが、未だ他にも考えられよう。それはベルシャの火の宗教がその原因とも考えられる。特に「炎」をもつた燃灯仏の出土したカピシ・ベグラムから百キロ北方の地点にスルフコタルという所があつて、そこにゾロアスター教の神殿があつた。ゾロアスター教はクシヤン民族の信仰であり、ここがその総本山の役割をもつていたことがカニシカ王の大きな像が出土したことから分る。この宗教の「火と光」が仏教に影響し、その思想の深化に大きな役割をもつたことは十分推測される。一步下つてゾロアスター教とまで行かなくても、火を重んずるベルシャ等西方の信仰が影

響したと考える方が自然のことかも知れない。

かく考えると大乘仏教は東西文化の総合、特にガンダーラ彫刻に示されるようにインドの心とギリシャの芸術、そしてヘルシヤの民間信仰等の交流がもたらした一大総合文化であると私は考えるのである。

[註]

(一) この彫刻は左右の図板に連絡がなく向って左半分は異った物語の燃灯仏をくつつけたと考えられている。

参考文献

・ 静谷正雄 初期大乘仏教の成立過程

Basham The Evolution of the concept of the Bodhisattva

Ingholt Gandharan Art in Pakistan

Rosenfield Dynastic Arts the Kushans

京都大学隊 パーミヤン 1・2・3・4

宮治 昭 中央アジア涅槃図の図像学的考察 仏芸一四七号

モタメダイ逢子 アフガニスタン出土の燃灯仏本生譚の諸遺例 仏芸一一七号

田辺勝美 カニシユカー一世金貨の国王立像考 仏芸一五六号

◇ 迦畢試国出土の仏教彫刻の製作年代について オリエンツ(昭和四十八年)

◇ Iranian Background of the Flaming and watering Buddha Image in Kushan Period, Orient vol 1981

Dr. Saifur Dar Kushan Art of Gandhara